Japanese Journal of Applied Psychology
2006, Vol. 31, No. 2, 76-88

原　著

援助行動発動時における社会的スキル，共感経験，援助行動経験の影響について[1)]

松浦　均*

An Examination of the Factors Affecting Decision Making on Whether to Help or not, with Focus on Social Skills, Empathic Experience, and Prior Experience in Helping

Hitoshi MATSUURA

The present study examined factors which influence one to decide whether to engage in helping behavior or not. In particular, social skills, empathic experiences, and prior experiences in helping ware featured. A total of 191 students participated in a questionnaire survey. The results indicated that empathic experiences influenced male participants' decision to help others, but not females'. Regarding Kakuta's four empathy experience types, it was found that the double-dominant type is most likely to engage in helping behavior. In addition, social skills were found to influence both males' and females' helping behavior significantly. Prior experience was also found to influence future decisions to help others, and it was also found that those with no prior experience were least likely to help others in subsequent opportunities. A structural equation model was adopted to test various affecting factors for the male and female participants. The results show that mutual helping experiences among male participants help improve their social skills, which leads them to have more successful experiences in helping behavior, which in turn affects the likelihood of engaging in successive helping behavior. For females, two direct causal paths were found leading to a decision to help: one direct path from helping outcome, and the other from social skills.

key words: helping behavior, decision to help, socials kills, empathic experience, prior experience in helping

問　題

援助行動の生起過程に関する研究は，「援助行動をしない理由」としてLatané & Darley (1970) によって説明された傍観者効果が発端といえる。これは援助行動生起に寄与する援助責任の社会的規範のモデルであった。その後，援助行動を行う理由としての愛他性の社会的規範 (Schwartz & Howard, 1984) や，共感性や思いやり，愛他性といった特性的要因（Coke et al. 1978; Toi & Batson, 1982; 菊池，1983; 桜井，1986; 渡辺・衛藤，1990 など多数あり），そして感情が媒介する帰属過程 (Meyer & Mulherin, 1980; Weiner, 1980) などが明らかにされてきた。

ところで，実際に援助行動を行う場合を考えると，その場所で目の前にいる困窮者の状況と自分の

* 中部大学人文学部
Faculty of Humanities, Chubu University

1) 本研究の一部は，日本社会心理学会第 43 回大会 (2002) にて発表された。

置かれた状況などが総合的に検討され，その結果，援助行動を行うかどうか，行うとすればどのような援助行動を行うのかといったことが決定される。援助者の状況認知および思考過程に関しては，松井(1989)の状況対応援助生起過程モデルにおいて詳細に検討されている。それによると一時的な状況判断や二次的な援助コストの算定などの援助事態をとりまく中心的事項を検討し，さらに感情の過程や規範の認識なども検討され，その結果援助行動を行う，あるいは行わないとする帰結が想定されている。このモデルによれば，援助事態に遭遇してから行動の意思決定までの短時間にこれだけのことを検討していることになる。

しかしながら，この思考過程に基づいて援助を行う決定に至ったとしても，まさに行動を起こそうとしたときに，援助を躊躇してしまい援助行動を起こさないこともあるだろう。具体的には次のような場合である。

たとえば繁華街で迷子になった小さな子どもを見つけたとき，その子どもから明確な援助要請がなくても，援助規範や共感性を内在していることで援助の動機づけが高まる可能性は大きい。そこでまず検討されることは，その子どもにどのように声を掛けるかといったことである。このとき，声の掛け方がわからず，援助を躊躇すれば，援助行動の発動は遅れてしまい，場合によっては看過されるのではないだろうか。

困窮者が目の前にいないような募金や寄付などの間接的援助を除けば，実際の援助行動の現場では困窮者との直接的な接触を通して発動される。そこでは援助者の最初の接触の仕方次第で援助意思は随意的に変化するであろう。つまり従来の援助行動生起過程の研究で想定されてきた援助意思決定時点よりも，まさに援助行動発動時点での援助が生起するための何かしらの要因が存在すると考えられる。本研究では援助行動発動時に作用する要因を検討する。

先の例のような場面で，相手に援助意思を伝える「声掛け」は社会的スキルである（菊池，1994)。援助行動における社会的スキルについては，庄司(1991)は「共感的・援助的スキル」の存在を示しているし，二宮(1994)は，思いやりのある援助行動に関わるスキルとして10の社会的スキルを明示している。また看護の場面では，患者理解のためのコミュニケーション技術（川野，1997; アブラハム・シャンリィ，細江監訳，2001等）が数多く提起されている。つまり援助場面では個人が持つ援助的な社会的スキルが行使されると考えられる。一方，菅原(1996)は「社会的スキルの欠如」と対人不安の密接な関係を指摘しており，スキルの低い人が直接的な対人行動である援助行動を起こしにくいことも容易に推測できる。これらのことから援助行動発動時において社会的スキルをもっているかどうかが大きく影響すると考えられる。とくに援助行動発動時から援助行動遂行時にかけては，相川ら(1993)の社会的スキルの生起過程モデルにおける「相手の対人反応の解読」の過程から「対人反応の実行」の過程までの部分が，そのまま該当すると考えられる。本研究では，一般に社会的スキルがある人の方が援助を発動させやすいと予測し，これを検討する。

相川ら(1993)の社会的スキル生起過程モデルによれば，社会的スキルを表出するまでに対人感情の生起と感情の統制といった感情に関わるステージを通過する。つまり援助行動発動時において，内在する社会的スキルを表出させるのは感情の過程であり，その感情としては，相手に対する思いやりや共感感情が該当する。この点については援助行動生起過程のモデルの中にも，Coke et al. (1978)の共感の媒介に関するモデルや，Meyer & Mulherin (1980)の帰属理論的モデルにより示されている。これらのことから援助行動発動時における要因としての「共感」について検討する。

ところで，実際の援助場面で援助者が目の前の困窮者に対して共感するといったとき，困窮者の感情をどのように共感すべきであろうか。困窮者は援助者から援助を受けるときに，必ずしも肯定的ではない複雑な感情を経験するとされる。たとえば援助される心苦しさによる不快感（相川，1984)，援助を受けることにより一時的に弱い立場となり感じる不衡平感(Walster et al., 1978)，一時的に借りを背負った感覚である心理的負債感（相川，1988)，自力で問題解決できないことによる自尊心の低下(Nadler & Fisher, 1986)等である。社会的スキルの生起過程に即して考えると，援助者側としては，困窮者側のこのような複雑な感情状態をできるだけ正確に把握することで，困窮者の状況を適切に理解して，どのような援助を行うべきかが判断されるとい

うことになる。その意味で，援助行動発動時においては相手の感情を正確に読み取る高度な能力が必要だと考えられる。

したがって，適切な援助行動を生起させるためには，その時点での相手の諸々の感情を弁別し，その場面で援助をする側として「共感できる感情」と「共感できない感情」とを区別して認識することが必要である。つまり援助場面での「共感」は，困っている相手がかわいそうだから援助するといった単純なものではなく，困窮者が本当に援助を欲していることを認識し，さらにどのような援助を期待しているのか相手の感情状態から把握することが必要だといえる。この点に関連して，角田 (1994) は，対人的な場面で自己と他者の感情経験を弁別して認識できるかどうかということについて，共感経験の概念を検討し，共感経験尺度改訂版 (EESR) を作成した。この尺度は，「共感」と「同情」を識別する尺度として開発されたもので，共有経験尺度と共有不全経験尺度の 2 種類の測定尺度からなる。前者は，相手の感情状態を共有できたことを明確に認識しているかどうかの尺度であり，後者は，相手の感情状態を共有できなかったことを明確に認識しているかどうかの尺度である。角田は，この 2 つの尺度得点の組み合わせにより 4 つの類型を想定している。すなわち両尺度とも値が高い「両向型」，共有経験尺度の値は高いが不全経験の値は低い「共有経験優位型（共有型）」，不全経験の値が高く共有経験の値が低い「共有不全経験優位型（不全型）」，どちらの値も低い「両貧型」である。

このなかで「両向型」は，相手の感情を共有したことも共有できなかったことも，両方とも明確に認識できた経験を持っていることから，自他の感情認識の相違を最も認識できるということであり，適切な他者理解を可能にする高い共感性を持っているとされる。「共有型」は共有経験が高いが，相手との共有不全の認識は希薄であることから，相手の感情との違いを認識できず，一方的に相手の感情状態を自己に引きつけて推測してしまう可能性が高いとされる。いわゆる未熟な共感性であり，援助場面で言えば，「困っていてかわいそうだから」と認識するのみで，相手がどのような感情状態にあるのかまでは認識するに至っていない，すなわち「同情」に当たるものとされる。これら 2 類型に関してはいえば，両向型の方がその場における自他の感情の相違を適切に把握でき，援助場面では両向型の方がより適切に対応できるものと予想される。

次に「不全型」は感情における自他の違いばかりに注目がいき，他者との交流を回避する傾向が強く，最も孤独感を持ちやすいことから，他者を助ける目的で他者と接触しなければならない援助行動は極めて生起しにくいと予想される。さらに「両貧型」は相手の感情を共有することができず，自他の感情の相違も認識できないわけであるから，対人的には最も未熟であるとされる。これら 2 類型は，援助行動は生起しにくいと考えられる。

本研究では，共感に関する上記 4 類型による個人特性が，援助行動発動時における援助意思決定にどのように関わっているのか，また社会的スキルにどのような影響を及ぼしているのか検討する。

最後に，援助行動発動時において援助意思を促進する可能性のある変数として援助経験を取り上げる。援助行動発動時には，他人の目や自身の援助能力，さらに援助リスクの認知など状況判断の過程で援助行動に向けての心理的負荷がかかる。そのような場合，過去に同じような状況で援助の行動をしたかどうかという経験が大きな意味を持つと考えられる。高木 (1987) は，非援助理由の 1 つに「援助または被援助の好ましくない経験」を挙げており，過去の援助体験が次の援助行動に影響を及ぼすことを示唆している。つまり，過去に一度でも援助の行動を起こした経験があれば，新たな類似場面に遭遇したときには，状況判断の過程は短縮されて援助意思の決定がされやすくなると考えられる。反対に過去に非援助の決定をしたのならば，新たな類似場面でもやはり援助の行動が生起しにくいと考えられる。

この点について，もう少し詳しく考えてみると，最初の援助行動がうまくいった場合は，そのことが，次回も同じようにやればうまくいくという根拠や自信となる可能性があるし，援助スキルを獲得して，それが次回の援助で役に立つと考えられるが，最初の機会で援助に失敗してしまった場合は，次回の場面に対応するスキルは獲得できず，同じようにはやれないと考えることから，次回の場面で援助行動を行うかどうかは，改めて検討を要することになる。ゆえに失敗経験は次回の行動を抑制させる方向に働き，成功経験は次回の行動を促進する方向に働

くと考えられる。したがって最初の援助行動について「成功した」との認識を持てば，それは「援助効果」として認識され（高木，1997），自分の行った援助が効果的であったと高く評価することが，援助に対する積極的な動機づけになると考えられ，援助行動発動時においては大きな要因となると考えられる。しかし高木は，援助効果の認識が次の行動をどのように規定するかということまでは確認していない。本研究では，援助行動の経験とそこでの援助効果の認識が今後の援助行動場面にどのような影響を及ぼすのか検討することを目的とする。

以上のことから，本研究では，社会的スキル，共感経験，援助経験とそのときの援助効果といった各変数が，新たに遭遇する援助場面での援助行動発動時にどのような影響を及ぼすのか検討する。その際，これらの変数が最終的な援助行動の意思決定にどのように関連しながら影響しているのか明らかにするために，援助意思を最終的な目的変数とする仮説的因果モデルを作成し，パス解析を行い検討する。

なお援助行動には日常的に頻繁に経験するようなものから，緊急時や災害時の援助のようにまれにしか経験しないものまで，非常に幅広く種類も多いが，今回は調査の対象をごく普通の一般的な生活をしている大学生とし，彼らがどのような援助行動をしているのか，その実態を踏まえた上で検討を行う。また大学生の日常的な援助行動においては友人間のソーシャルサポートなどの援助的行動によっては男女の相違も考えられるので，この点も視野に入れて検討を行う。

考えられる仮説は以下のとおりである。

仮説 1　社会的スキルが高い人の方が，低い人に比べて援助意思が高いであろう。

仮説 2-1　共感経験尺度に基づく類型では，両向型が最も援助意思が高く，次いで共有型，不全型，両貧型という順で援助意思が低くなると予想される。

仮説 2-2　共感経験尺度における共有経験および共有不全経験は，社会的スキルと正の関係を持つと予想される。

仮説 3-1　援助経験がある方が，援助経験がない場合よりも，次回の援助場面での援助意思は高いであろう。

仮説 3-2　援助経験があっても，援助効果を認識している場合の方が，援助効果を認識できなかった場合に比べて援助意思は高いであろう。

方　　法

調査対象と調査時期　愛知県内のＣ大学とＤ大学の学生計 191 名。内訳は男子 118 名，女子 73 名。調査時期は平成 14 年 7 月。調査は双方の大学で開講している心理学の授業時間に実施した。所要時間は 20 分程度であった。

調査内容

1. まず 12 種類の援助行動類型について以下の質問をした。これらは種々の援助行動の類型研究（高木，1982）を参考にして主だった 12 種類の援助行動を選んだもので，その際，いわゆるボランティア活動の範疇の援助的活動もこの中に加えることにした。できるだけ幅広く事例を想起してもらうために，たとえば「国内外向けの募金活動または集金活動」といったように一般的で概括的な記述にした。

質問の内容は以下のとおりである。

①12 種類の援助行動類型おける過去の経験をたずねた。経験がある人に対しては，どのような事例か差し障りのない程度に具体的に記述させた。

②各援助行動類型について「援助経験あり」の人に対して，その時の援助効果をたずねた。（ほぼ完遂・不十分・失敗・効果不明の 4 種から選択）

③各援助行動類型について「援助経験あり」の人に対して，類似状況に遭遇した際の援助行動意思をたずねた。（援助する・たぶん援助する・たぶん援助しない・援助しないの 4 段階評定）

④各援助行動類型について「援助の経験なし」の人に対して，新規の状況に遭遇した際の援助行動意思をたずねた。（援助する・たぶん援助する・たぶん援助しない・援助しない，の 4 段階評定）

⑤②の「援助経験あり」の人について「不十分」「失敗」と回答した者に対してその理由をたずねた。その際，あらかじめ用意した 22 種の理由から該当するものを選択。複数回答可とした。

⑥③の再度の状況での援助行動意思で「たぶん援助しない」「援助しない」と回答した者に対してその理由をたずねた。⑤と同様の 22 種類の理由から該当するものを選択。複数回答可とした。

⑦④の新規状況での援助行動意思で「たぶん援助しない」「援助しない」と回答した者に対してその理由をたずねた。⑤と同様の22種類の理由から該当するものを選択。複数回答可とした。

2. 社会的スキル尺度　菊池(1988)による社会的スキル尺度青年版(Kiss-18)の18項目を用いた。
3. 共感経験尺度　角田(1994)による共感経験尺度改訂版の20項目を用いた。下位尺度は共感経験10項目，共感不全経験10項目である。

結　　果

大学生の援助行動の経験状況について

12類型の援助行動について，大学生の経験状況ならびに次の機会における援助意思の調査結果をTable 1に示した。

被調査者全体の援助経験の合計延べ数は1,073件であった。それに対して未経験の合計延べ数は1,214件であった。想定された全件数のうちの経験延べ数の割合は47.3%で経験率は半数弱であった。これを一人あたりの援助経験数にすると12類型中の5.77件となる。なおすべての種類について未経験の者は5名いた。また最も多くの種類の援助を経験している者は12類型中10類型の援助行動を経験していた。

経験率の高かった援助行動は，順に「援助類型12: 友人知人の相談に乗るなど精神的支援，サポート行動」「援助類型10: 小さな親切（道案内，拾得物届け出等）」「援助類型8: 小物の貸与，分与」「援助類型6: 地域ボランティア活動」であった。反対に経験率の少なかったものは，順に「援助類型7: 事故状況でのけが人の介抱，救急手配，関係者への連絡等」「援助類型3: 地震，洪水等の災害救援，復旧，捜索等のボランティア活動」「援助類型4: 入院療養中，自宅療養中の人などに対する看護介護活動」「援助類型2: 国内外の災害，難民救援に関する物資援助，人的援助」であった。

次に，経験した援助行動が成功裏に終わったのか失敗に終わったのかという「援助効果」の認識についてみた。これは経験事例だけを分析の対象とした。結果は，被調査者全体の経験事例において，自分の行った援助を肯定的に評価している割合は62.0%，逆に否定的に評価している割合は13.7%であった。援助がどのような結果になったか効果不明とした割合は24.3%であった。この効果不明については，「募金活動」や「物資提供」などの援助行動で顕著であった。募金活動などは日常的で簡便な援助活動であるが，援助窓口と実際の援助活動現場が離れている間接的な援助であり，実際は募金や提供物資がどのように使われたのか援助をした者にはわからない場合が多い（松浦，1990）。そのため「効果不明」とされ，そのことがまた援助を生起させないことにつながっていることを示唆している。

次回の援助場面における行動意思について

各援助行動での経験が次回の同様な援助場面においてどのような影響があるのか検討するため，援助経験の有無によって新たな類似状況で援助行動を起こす意思があるのかどうか，その関係をみた。

将来，類似場面に遭遇した場合の援助行動意思は，4段階の評定尺度としてたずねた。実人数についてはTable 1のとおりである。その際，それぞれの援助類型について援助経験者と未経験者とで，次回の援助行動意思に違いがあるのかどうか，援助意思における「前向き（次回も「援助する」と「たぶん援助する」の合計）」と「後ろ向き（次回に「援助しない」と「たぶん援助しない」の合計）」の人数比率についてカイ2乗検定を行った。その結果12類型のうち10種類の援助類型において援助経験者の方が次回の行動意思が前向きの者の比率が有意に高く，未経験者のそれを大いに上回る結果となった。一度経験した援助行動は，次回も同様の援助行動をすると意思表明した者が多く（延べ件数のうち88%），反対に援助未経験者では，次回も援助に後ろ向きの者が約30%いた。

援助経験者のなかでも次回の援助について後ろ向きの比率がとくに高かったのは「援助類型12: 友人知人の相談に乗るなど精神的支援，サポート行動」であった。援助の経験実数はもっとも多い類型であるが援助効果については否定的評価や効果不明としたものが多く，その理由として「相談には乗るが適切なアドバイスができない」とか，「相手の状況が改善しなかった」等が挙げられており，この類型の援助の難しさを示している。その他の援助類型については，「類型7: 事故状況でのけが人の介抱，救急手配，関係者への連絡等」が比率において差がなかった。これについては，援助経験者は全員次回も援助

Table 1　各援助行動類型における援助経験とその援助効果の認識，および今後の行動意思

援助行動の類型	経験者数	未経験者数	経験率	援助経験者における経験時の援助効果の認識			
				成功（比率%）	不十分（比率%）	失敗（比率%）	効果不明（比率%）
類型 1　国内外向けの募金活動または集金活動	80	111	0.42	36 (45)	5 (6.2)	0 (0)	39 (48.8)
類型 2　国内外の災害，難民救援に関する物資援助，人的援助	40	151	0.21	16 (40)	1 (2.5)	0 (0)	23 (57.5)
類型 3　地震，洪水等の災害救援，復旧，捜索等のボランティア活動	24	167	0.13	11 (45.8)	2 (8.3)	1 (4.2)	10 (41.7)
類型 4　入院療養中，自宅療養中の人などに対する看護介護活動	26	164	0.14	16 (61.5)	5 (19.2)	0 (0)	5 (19.2)
類型 5　老人ホーム，児童施設等の福祉施設慰問，訪問ボランティア活動	63	128	0.33	40 (63.5)	10 (15.8)	0 (0)	13 (20.6)
類型 6　地域ボランティア活動（環境美化，清掃奉仕等）	128	63	0.67	86 (67.2)	17 (13.3)	1 (0.8)	12 (9.4)
類型 7　事故状況でのけが人の介抱，救急手配，関係者等への連絡	16	175	0.08	9 (56.3)	3 (18.8)	1 (6.2)	3 (18.8)
類型 8　小物の貸与，分与	159	28	0.85	115 (72.3)	13 (8.2)	4 (2.5)	278 (17.0)
類型 9　業務における代役，代行	93	98	0.49	61 (65.6)	15 (16.1)	0 (0)	17 (18.3)
類型 10　小さな親切（道案内，拾得物届け出等）	163	28	0.85	113 (70.2)	11 (6.8)	5 (3.1)	32 (19.9)
類型 11　労力，労働の提供（重い荷物運搬手伝い等）	113	78	0.59	91 (80.5)	8 (7.1)	1 (0.9)	13 (11.5)
類型 12　友人知人の相談に乗るなど精神的支援，サポート行動	168	23	0.88	63 (37.5)	37 (22.0)	5 (3.0)	63 (37.5)
合計数（経験率は平均）	1,073	1,214	0.47	657 (62.0)	127 (12.0)	18 (1.7)	257 (24.3)

援助行動の類型	援助経験者における今後の行動意思（人数）					
	援助する	たぶん援助する	前向きの人数合計（比率%）	たぶん援助しない	援助しない	後ろ向きの人数合計（比率%）
類型 1　国内外向けの募金活動または集金活動	18	55	73 (91.3)	5	2	7 (8.7)
類型 2　国内外の災害，難民救援に関する物資援助，人的援助	15	22	37 (92.3)	1	2	3 (7.7)
類型 3　地震，洪水等の災害救援，復旧，捜索等のボランティア活動	7	16	23 (95.8)	1	0	1 (4.2)
類型 4　入院療養中，自宅療養中の人などに対する看護介護活動	15	10	25 (96.2)	0	1	1 (3.8)
類型 5　老人ホーム，児童施設等の福祉施設慰問，訪問ボランティア活動	18	39	57 (90.5)	4	2	6 (9.5)
類型 6　地域ボランティア活動（環境美化，清掃奉仕等）	34	75	109 (85.2)	10	9	19 (14.8)
類型 7　事故状況でのけが人の介抱，救急手配，関係者等への連絡	11	5	16 (100)	0	0	0 (0)
類型 8　小物の貸与，分与	66	73	139 (89.1)	10	7	17 (10.9)
類型 9　業務における代役，代行	26	50	76 (85.4)	9	4	13 (14.6)
類型 10　小さな親切（道案内，拾得物届け出等）	104	49	153 (96.2)	5	1	6 (3.8)
類型 11　労力，労働の提供（重い荷物運搬手伝い等）	57	44	101 (93.5)	1	6	7 (6.5)
類型 12　友人知人の相談に乗るなど精神的支援，サポート行動	52	72	124 (74.7)	35	7	42 (25.3)
合計数（経験率は平均）	423	510	933 (88.4)	81	41	122 (11.6)

援助行動の類型	援助未経験者における今後の行動意思（人数）						援助経験有無による次の行動の前向き後ろ向きの比率の差（カイ2乗値）
	援助する	たぶん援助する	前向きの人数合計（比率%）	たぶん援助しない	援助しない	後ろ向きの人数合計（比率%）	
類型 1　国内外向けの募金活動または集金活動	14	60	74 (66.7)	20	17	37 (33.3)	15.85***
類型 2　国内外の災害，難民救援に関する物資援助，人的援助	33	79	112 (75.2)	21	16	37 (24.8)	5.66*
類型 3　地震，洪水等の災害救援，復旧，捜索等のボランティア活動	45	81	126 (75.9)	24	16	40 (24.1)	4.92*
類型 4　入院療養中，自宅療養中の人などに対する看護介護活動	27	71	98 (59.3)	32	33	65 (40.7)	12.8***
類型 5　老人ホーム，児童施設等の福祉施設慰問，訪問ボランティア活動	15	50	65 (50.8)	33	30	63 (49.2)	28.83***
類型 6　地域ボランティア活動（環境美化，清掃奉仕等）	14	28	42 (67.8)	8	12	20 (32.2)	7.68**
類型 7　事故状況でのけが人の介抱，救急手配，関係者等への連絡	90	67	157 (89.7)	10	8	18 (10.3)	1.82 *n.s*
類型 8　小物の貸与，分与	7	8	15 (53.6)	3	10	13 (46.4)	21.9***
類型 9　業務における代役，代行	15	42	57 (58.2)	11	30	41 (41.8)	16.46***
類型 10　小さな親切（道案内，拾得物届け出等）	11	9	20 (74.1)	6	1	7 (25.9)	16.83***
類型 11　労力，労働の提供（重い荷物運搬手伝い等）	26	38	64 (84.2)	2	10	12 (15.8)	4.03*
類型 12　友人知人の相談に乗るなど精神的支援，サポート行動	8	10	18 (78.3)	2	3	5 (21.7)	0.14 *n.s*
合計数（経験率は平均）	305	543	848 (70.3)	172	186	358 (29.7)	

する意思を持っているが，もともと経験者が少なく，大多数の未経験者において次回も援助の行動を行わないという結果であった。

各尺度の得点と尺度間の相関関係について

まず，援助経験に関する指標として援助経験値（12 類型のうちの経験したことがある類型の合計，12 点満点）を求めた。援助効果に関しては，各個人

Table 2　各項目の平均値と項目間の相関関係

	記述統計量			
	全体平均	男子 (n=118)	女子 (n=73)	男女差 t 値
援助意思	36.12 (6.554)	35.23 (6.745)	37.51 (6.028)	−2.543**
社会的スキル	55.21 (10.865)	55.70 (11.548)	54.44 (9.720)	*n.s*
共有経験得点	36.26 (10.451)	35.14 (11.056)	38.06 (9.197)	−1.869^{+}
共有不全得点	34.17 (10.853)	35.64 (10.645)	31.79 (10.836)	2.383**
援助経験値	5.77 (2.029)	5.54 (2.057)	6.11 (1.964)	−1.858^{+}
援助成功得点	11.76 (6.930)	11.70 (6.994)	11.85 (6.875)	*n.s*
援助効果得点	2.81 (0.429)	2.85 (0.480)	2.75 (0.326)	*n.s*

	相関係数						
	援助意思	社会的スキル	共有経験	不全経験	経験値	援助成功	援助効果
援助意思	—	.272**	.279**	.086	.319***	.366***	.305***
社会的スキル	.306**	—	.222	.066	.256**	.354***	.253**
共有経験得点	.098	.404***	—	.134	.267**	.236*	.077
共有不全得点	−.190	−.239	−.110	—	.137	.084	.034
援助経験値	.235	.251*	.013	.018	—	.803***	−.009
援助成功得点	.294*	.234	.011	−.073	.550***	—	.087
援助効果得点	.399***	.130	.107	−.112	.094	.279*	—

(　) 内は標準偏差　*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, $^{+}$ p<.1　相関係数は，右上が男子の結果 (n=106)，左下が女子の結果 (n=63) である。

の 12 類型の援助効果の平均値（経験ある類型のみの「効果不明」を除く 3 段階の評定平均）を援助効果得点とし，また 12 類型のうち経験ある類型の援助効果の値を単純加算したものを援助成功得点（36 点満点）として算出した。なお，この援助効果得点と援助成功得点は，前者は 1 回の援助における効果認識の程度を示すものであり。後者は効果的な援助経験をどの程度持っているかを示すものと考えている。

次に，全般的にその人が次回の類似する援助場面で援助行動をするかどうかについて，12 類型における援助意思を合計して援助意思得点（48 点満点）を求めた。

最後に，社会的スキル尺度 Kiss-18 の得点（90 点満点），および共感経験尺度得点（共有経験得点および共有不全得点，各 60 点満点）を算出した。

上記の結果について，各指標の相互相関を含めて Table 2 に示した。記述統計量の算出にあたっては，回答に一部不備のあった男子 3 名のデータを，また相関係数算出にあたっては援助経験の全くない 5 名と相互に欠損値のあるケースが分析から除去された。その結果，分析の対象者人数は男子 106 名，女子 63 名であった。なお男女で結果が異なる傾向が見られたため，以下の分析は男女別に行った。

援助経験値は，男子に比べて女子の方が高い傾向の値を示した（t 値＝−1.858, p<0.1）。なお女子の方が有意に援助経験比率が高いのは，「類型 2: 国内外の災害，難民救援に関する物資援助，人的援助」（χ^2 値＝4.097, p<0.05），「類型 5: 老人ホーム，児童施設等の福祉施設慰問，訪問ボランティア活動」（χ^2 値＝12.756, p<0.001）の 2 類型であった。反対に「類型 11: 労力，労働の提供（重い荷物の運搬手伝い等）」（χ^2 値＝4.472, p<0.05）は男子の方が有意に経験比率が高かった。

援助意思得点は，48 点満点中の 36.12 という値を示しており，次回の新たな状況で援助をする意思は比較的高いという結果であった。なお援助意思得点については男子に比べて女子の方が有意に高かった（t 値＝−2.543, p<0.05）。

援助効果の平均値は 2.81 (SD＝2.029) とかなり高い値であった。被調査者が，自分の行った援助行動について高い援助効果を認識していることがわかる。延べ実数では「失敗経験」も多いが，経験した援助の多くは「成功した」と認識していたことにな

Table 3　共感経験尺度に基づく 4 類型の平均値と標準偏差

	類型 A: 両向型 $n=48$	類型 B: 共有型 $n=43$	類型 C: 不全型 $n=42$	類型 D: 両貧型 $n=55$	多重比較
援助意思	37.69 (5.058)	36.12 (6.973)	35.38 (5.374)	35.31 (7.967)	
社会的スキル	58.27 (11.656)	56.91 (8.309)	52.64 (10.615)	53.36 (11.712)	類型 A＞類型 C
経験値	6.43 (1.964)	5.70 (1.626)	5.41 (1.920)	5.52 (2.542)	類型 A＞類型 C
援助成功得点	12.88 (7.645)	12.70 (5.890)	10.82 (7.429)	10.74 (6.259)	
援助効果	2.80 (0.290)	2.79 (0.301)	2.82 (0.644)	2.85 (0.429)	
共有経験	45.54 (6.530)	43.56 (5.179)	28.07 (6.609)	28.57 (7.477)	類型 A＝B＞類型 D＝C
共有不全経験	43.02 (8.331)	24.77 (6.866)	42.83 (7.015)	27.22 (5.061)	類型 A＝C＞類型 D＝B

(　)内は標準偏差

る。援助成功得点は，11.76 という値を示したが，最大値は 27 であり，被調査者間の分散が大きい。

共感経験尺度については，共有経験得点は女子の方が男子よりも高い傾向の値を示し（t 値＝－1.869, $p<0.1$），共有不全得点で男子の方が女子よりも有意に高い得点を示した（t 値＝－2.383, $p<0.05$）。この結果は角田 (1991, 1994) と共通するものであった。

各尺度間相互の相関係数を算出した。その結果，共感経験尺度における共有不全経験はいずれの尺度とも相関は見られなかった。援助意思得点については，男子において共有不全経験以外とはすべてにおいて高い相関関係があった。なお，この相関関係についても男子と女子とで様相が異なり，とくに共有経験尺度において，男子が他の多くの変数間で相関が見られたのに対して，女子では社会的スキルと有意な相関があったのみであった。また，その社会的スキルも，男子では他の多くの変数間で相関が見られたのに対して，女子では先述の共有経験と援助意思，援助経験値と相関が見られるにとどまった。一方の共有不全得点は，男女とも他変数間で相関は全く見られなかった。

共感経験尺度 4 類型の様相について

次に，共感経験尺度の 2 つの下位尺度に基づいて被験者を以下の 4 類型に分類した。共有経験得点および共有不全得点の平均値で 2 分し，両得点とも高い両向型，共有経験得点は高いが不全経験得点は低い共有型，その逆の不全型，両得点とも低い両貧型の 4 類型である。グループごとに算出された各尺度得点を Table 3 に示した。

4 類型間の差を検討するため，一要因分散分析を行った。その結果，有意な差が見られたのは社会的スキル得点のみであった ($F(3, 184) = 3.161$, $p<.05$)。多重比較の結果，両向型の方が不全型に比べて有意に高いことが示された。また経験値において有意な傾向性が見られた ($F(3, 179) = 2.447$, $p<0.1$)。多重比較の結果，これも両向型が不全型よりも高い値を示していた。なお，共有経験および共有不全経験は，その平均値を境にして 4 類型の群分けをしているため，数値は共有経験の場合，類型 A･B2 群と類型 C･D2 群の間で，共有不全の数値は類型 A･C2 群と類型 B･D2 群の間で有意差があった。

4 類型間の差が見られたのは以上であるが，あくまでも数字の傾向として，共有経験尺度で高い値を示した 2 類型が他の 2 類型に比べて，援助意思，援助成功，経験値で高めの値を示していた。

援助行動意思を決定する仮説的因果モデル

今回取り上げた各変数が援助行動の意思に影響する過程について仮説的因果モデルを作成し検討することにした。

援助経験，援助効果，社会的スキルの有無，共感経験 2 尺度が，援助意思に及ぼす影響を想定して，因果モデルを設定しパス解析を行った。この分析では潜在変数は想定せず，各変数から最終的な援助意思へのパスに加えて，共感経験 2 尺度それぞれから社会的スキルへのパス，社会的スキルから援助成功経験へのパスを想定した。なおこの分析では，援助の経験値を，経験数と援助効果の認識を掛け合わせた援助成功経験という変数に置き換えてモデルの中に入れることにした。

先の相関分析で男子と女子とで様相が異なることから，因果モデルは共通として，解析は男女別に行った。パス図を Figure 1, Figure 2 に示した。

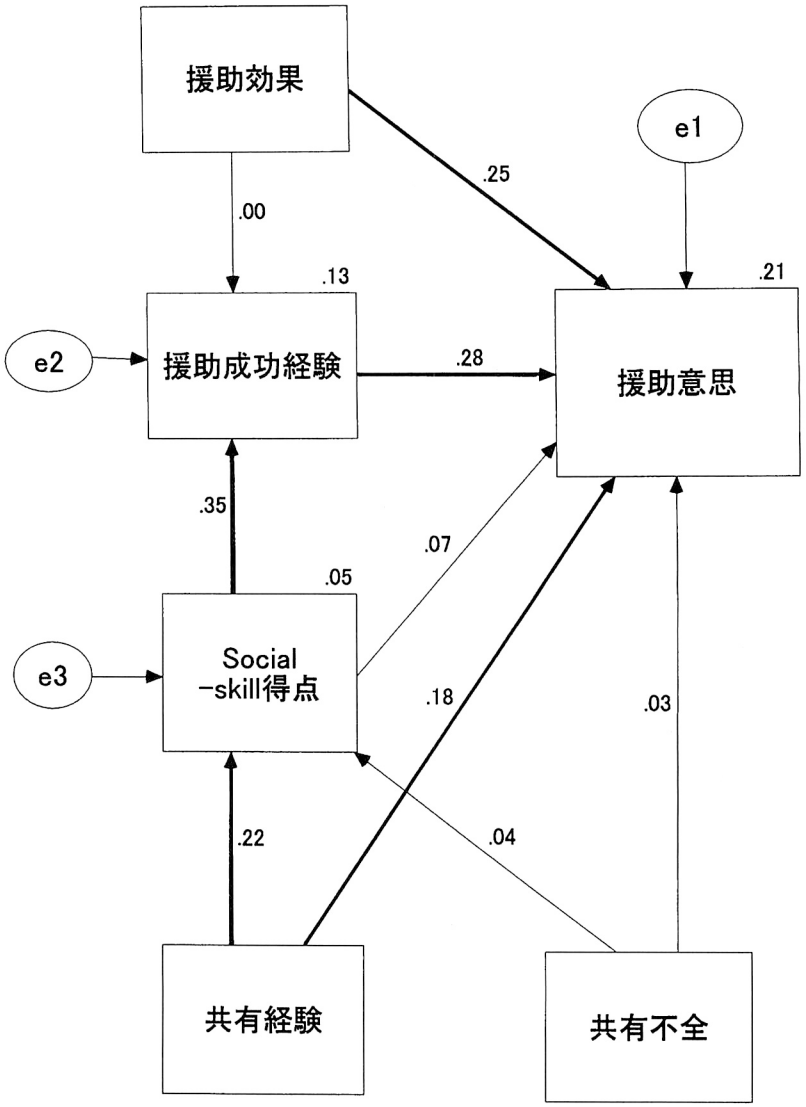

Figure 1　各変数から援助意思に及ぼす影響についての仮説的因果モデル（男子）

決定係数 (R^2) と有意な標準化係数（有意水準 5%未満および 1%未満のものを太線で示してある）の値をパス図の中に示した。この仮説的因果モデルの全体の適合度は，χ^2 値＝21.369（自由度＝15，有意水準＝0.125），GFI＝0.960，AGFI＝0.888，RMR＝3.930，AIC＝75.369 で，適合性は十分であるといえる。

この因果モデルによると，男子 (Figure 1) は，援助効果から援助意思へのパス，援助成功経験から援助意思へのパス，共有経験から社会的スキルへのパス，社会的スキルから援助成功経験へのパスが有意であった。共有経験から援助意思へのパスは傾向性を示した。これらのことから，男子の場合は，共感経験のうちの共有経験が社会的スキルに作用し，それが成功経験に影響し，さらに援助意思に影響するという一連の経路の存在が明らかになった。一方，女子 (Figure 2) では，共有経験から社会的スキルへのパス，社会的スキルから援助意思へのパスが有意であった。また社会的スキルから援助成功経験へのパスも有意であった。加えて援助効果から援助意思へのパスと援助効果から援助成功経験へのパスが有意であった。女子は，援助効果から援助意思への直接的なパスと，それとは別の社会的スキルから援助意思への直接的なパスの 2 つの主な経路があるこ

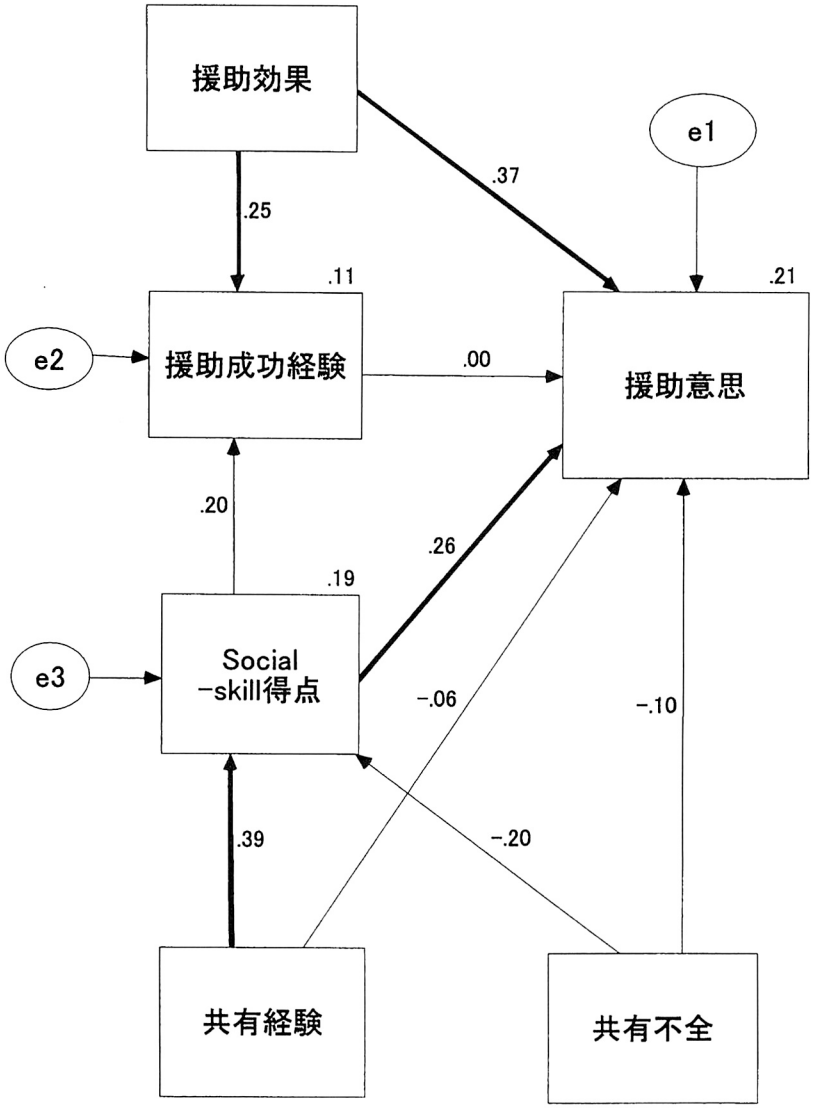

Figure 2　各変数から援助意思に及ぼす影響についての仮説的因果モデル（女子）

とが示された。

考　　察

社会的スキルおよび共感経験の影響について

まず社会的スキルと援助意思との関係について考察する。男女とも，社会的スキルと援助意思との相関は有意であった。また仮説的因果モデルに基づくパス解析の結果，男子では社会的スキルから援助意思へのパスは有意ではなかったが，女子は有意であった。これらの結果から，女子では社会的スキルが高いほど援助が生起しやすいことが明らかになり，女子については仮説 1 は支持されたといえる。

この結果の背景として，対人支援的な性役割期待に基づくと考えられる感情理解のスキルにおける女性の優位性があること（斎藤，1994）などが考えられよう。社会的スキルは，臨床場面における対人支援技術としても取り上げられている。尾崎 (1997) は，臨床場面における対人的な援助技術として，患者への理解の技術，質問の技術，意見や助言の技術等について述べているが，このような対人援助的技術と援助行動における援助スキルは同じ性質を持つものと考えることができる。実際の援助行動場面における援助発動時の相手とのコミュニケーションが，援助行動生起において重要な要因であることを

示唆するものである。その意味で，困窮者に対するコミュニケーションスキルに自信がなければ，援助をしない可能性が高くなると考えられる。今後は，経験した援助場面で実際にどのような具体的なコミュニケーションが行われたのか等，確認していく必要がある。

次に，共感経験と援助意思との関係について見てみると，男子では共有経験と援助行動生起との間に正の関係があることが示されたが，女子では無関係であった。また共有不全経験と援助行動生起については男女とも無関係であった。共感経験の4類型については，数字的には両向型において援助意思がもっとも高かったが，それ以外の3類型とは有意差はなく，仮説2-1は支持されなかった。ただし，過去の援助経験すなわち経験値については両向型と不全型の間に有意な傾向があり，両向型の人間が最も援助行動を行う可能性が高いことはかろうじて示唆された。

結果として，共感経験4類型は援助意思および援助行動関連の各指標において明確な弁別性を示さなかったが，共有経験尺度に関していえば援助行動生起との関連は示された。すなわち，相手の感情状態を理解する共有経験を持っていることが援助行動生起に影響を及ぼしているということで，共感性が援助行動に影響を及ぼすという従来の知見と同じ方向の結果となった。これに対して，今回，共有不全経験が他の変数と無関係だったことについては，角田(1994)が言うように，共有不全経験は対人関係そのものを否定するものではないことから，共有不全経験が，良好な対人関係が期待される援助行動や援助意思と必ずしも負の関係が予想されるものではないということ，共有不全経験が単独に作用しているわけではないということが理由として考えられよう。

援助経験と援助意思との関係

今回の検討結果から，援助行動12類型のうち10類型において，過去に経験のある援助については次回も援助を行う可能性があるとする者の方が多く，経験のない援助は次回も援助行動をしない可能性があるとする者の方が多かった。このことは援助経験が次回の援助意思に結びつく可能性を示唆し，仮説3-1は支持されたといえる。

さらに，援助経験があっても，援助効果を認識している場合の方が，つまり成功経験を多く持っていることが，次回の援助意思に結びついていることが明らかにされた。これは仮説3-2を支持する結果となった。高木(1997)の「援助を経験して援助効果を認識することで，次回の援助の積極的な動機づけをもたらす」との仮説を実証したことになる。また援助の成功経験は，高木の言う援助者に満足をもたらす「援助成果」に当たるものと考えられる。今回の調査では，成功経験が満足感をもたらしているかどうか確認されなかったが，肯定的に認識していることは間違いないであろう。

仮説的因果モデルによる検証結果について

仮説的因果モデルについては，男女で異なる様相を示した。男子では，共有経験から社会的スキルへの正のパスを経て，それが援助成功経験に至り，最終的に援助意思に結びつくという主たる構造と，援助効果が単独に援助意思を決定する構造が示された。次回の援助行動発動時の意思決定には過去の援助での成功経験や援助効果の認識が必要であることを示唆している。あくまで援助がうまくできたかどうかの認識が強く働くと考えられる。

一方，女子では，共有経験から社会的スキルへの正のパスを経るというところまでは男子と同じであるが，そこから援助意思に直接パスが出る構造である。女子では，社会的スキルがあることがそのまま次回の援助意思に結びつくことを示唆している。また援助効果が単独で援助意思に連関する点も男子と共通するが，援助効果から援助成功得点にも正のパスがあるのは，援助効果と援助成功得点が男子では無相関であったのに対し，女子では相関が見られたことに起因するものと考えられる。女子の場合，援助意思の決定は2つの経路，すなわち援助経験に起因する経路と，共有経験と社会的スキルに起因する経路が存在する可能性が示されたといえよう。

共感経験2尺度と社会的スキルとの関係については，共有経験から社会的スキルへのパスが男女とも有意であり関連があることが示された。しかし，共有不全経験から社会的スキルへのパスは有意ではなかった。仮説2-2は一部しか指示されなかったことになる。実質的な意味として，相手の感情を共有できること自体が社会的スキルの一要素ととらえることができ，この関連性は十分に理解できるところである。

今後の展望

今までの援助行動研究は，援助が生起する要因や援助行動の過程に焦点が当てられてきたものが多いが，今後は，援助の失敗や不適切な援助事例にも焦点を当てて，人はなぜ援助をしないのかということをさらに明らかにしていく必要があると考えている。

たとえば，多くの日常的な援助行動は，見ず知らずの人に対して直接的に行われる行動であるが，昨今の殺伐とした社会状況の中で，見知らぬ他者とのコミュニケーションや関わりを避ける傾向が広がっているように思われ，それが理由で援助行動が生起しない例もあるように思う。温かい人間関係を築いていくことが難しくなりつつある社会的状況が，援助行動の抑制に影響しているのではと推測する。大きな視点で，社会的状況と援助行動生起との関連を抑えておく必要があると考える。

さらに具体的なレベルで考えると，援助行動は行動を発動させるための最初のコミュニケーションが重要になるのだが，今回の調査で社会的スキルの有無と援助意思の関係が示唆されたことにより，むしろ「援助すべき場面でのコミュニケーションをどうしてよいかわからないから援助しない」といった問題が潜在的にあるのではと推測する。今後の課題としては，援助規範は持っていても，スキルがないから援助行動をしないという人たちの存在を明らかにして，援助行動のための具体的なスキルを提案していくことも必要だと考える。

今回の研究により，一度援助行動を経験すると次回も行動を起こしやすいといった援助行動の良い循環が存在することが明らかになったが，同時に，援助を経験しないことで次回も援助しないという悪い循環も存在するということも明らかになった。前者はそのまま進んでいけば良いわけであるが，後者はどこかでその循環を断ち切る必要がある。援助場面で援助をしなかった人が，どうすれば次回の場面で援助するようになるのか今回の研究では明らかにすることはできなかったが，この点こそが最も検討すべき課題だと認識している。続けて検討していきたい。

引用文献

アブラハム，C. & シャンリィ，E. 2001 ナースのための臨床社会心理学　看護場面の人間関係のすべて　細江達郎監訳　北大路書房

相川　充 1984 援助者に対する被援助者の評価に及ぼす返報の効果　心理学研究，**55**, 8-14.

相川　充 1988 心理的負債に対する被援助利益の重みと援助コストの重みの比較　心理学研究，**58**, 366-372.

相川　充・佐藤正二・佐藤容子・高山　巌 1993「社会的スキルという概念について—社会的スキルの生起過程モデルの提唱」　宮崎大学教育学部紀要（教育科学），**74**, 1-16.

Coke, J. S., Batson, C. D., & McDavis, K. 1978 Empathic mediation of helping: A two-stage model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 752-766.

角田　豊 1991 共感経験尺度の作成　京都大学教育学部紀要，**37**, 248-258.

角田　豊 1994 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み　教育心理学研究，**42**, 193-200.

川野雅資 1997 患者—看護婦関係の理論　川野雅資編著『患者—看護婦関係とロールプレイング』第1章　日本看護協会出版社．Pp. 3-44.

菊池章夫 1983 向社会的行動の発達　教育心理学年報，**23**, 118-127.

菊池章夫 1988 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル　川島書店

菊池章夫 1994 社会的スキルの心理学　100のリストとその理論　川島書店

Latané, B. & Darley, J. M., 1970 *The unresponsive bystander: Why doesn't the help?* New York: Appleton-Century-Crofts. 邦訳　竹村研一・杉崎和子（訳）1997 冷淡な傍観者—思いやりの社会心理学—　ブレーン出版

松井　豊 1989 援助行動の意思決定過程に関する研究　東京都立大学博士論文（未公刊）

松浦　均 1990「寄付行為」と「募金活動」の関係について　日本グループ・ダイナミックス学会第38回大会発表論文集，171-172.

Meyer, J. R. & Mulherin, A. 1980 From attribution on to helping: An analysis of the mediating effects of affect and expectancy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 201-210.

Nadler, A. & Fisher, J. D. 1986 The role of threat to self esteem and perceived controle in recipient reactions to aid: Theory development and validation. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experi-*

mental social psychology, Vol. 19. Academic Press.

二宮克美 1994 援助のスキル　菊池章夫・堀毛一也編 社会的スキルの心理学　100のリストとその理論 川島書店. Pp. 93-105.

尾崎　新 1997 対人援助の技法　誠信書房

斎藤耕二 1994 感情処理のスキル　菊池章夫・堀毛一也編　社会的スキルの心理学　川島書店. Pp. 38-51.

桜井茂男 1986 児童における共感と向社会的行動の関係　教育心理学研究, **34**, 342-346.

Schwartz, S. H. & Howard, J. A. 1984 Internalized values as motivators of altruism. In E. Staub, D. Bar-Tar, J. Karylowski & J. Reykowski (Eds.) *Development and Maintenance of Prosocial Behavior*. Plenum Press. Pp. 229-255.

庄司一子 1991 社会的スキル尺度の検討—信頼性・妥当性について　教育相談研究, **29**, 18-25.

菅原健介 1996 対人不安と社会的スキル　相川充・津村俊充編　社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する　誠信書房. Pp. 111-128.

高木　修 1982 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学, **23**, 135-156.

高木　修 1987 非援助動機の構造とそれに基づく非援助行動の特徴づけ　関西大学社会学部紀要, **19**(1), 27-49.

高木　修 1997 援助行動の生起過程に関するモデルの提案　関西大学社会学部紀要, **29**(1), 1-21.

Toi, M. & Batson, C. D. 1982 More evidence that empathy is a source of altruistic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 281-292.

渡辺弥生・衛藤真子 1990 児童の共感性及び他者の統制可能性が向社会的行動に及ぼす影響　教育心理学研究, **38**, 151-156.

Walster, E., Walster, G., & Berscheid, E. 1978 *Equity: Theory and research*. Allyn and Bacon.

Weiner, B. 1980 A cognitive (attribution)-emotion-action model of motivated behavior: An analysis of judgments of help-giving. *Journal of Personality & Social Psychology*, **39**, 186-200.

(受付: 2005. 8. 11, 受理: 2006. 1. 13)